

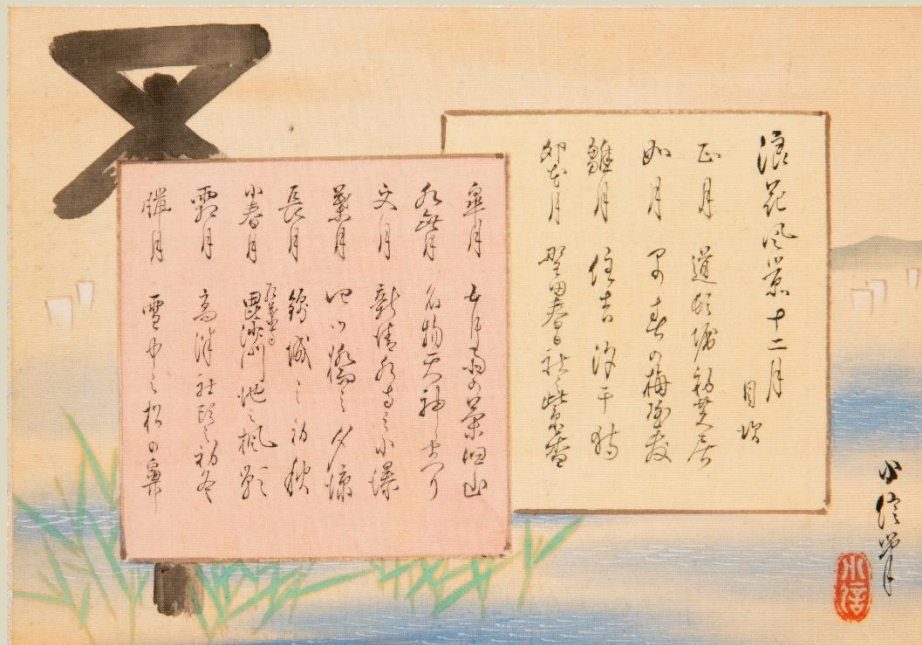
浪花の風景

大阪くらしの今昔館の収蔵する資料の中から、浮世絵師として名を馳せた二代貞信が描いた、浪花の一年間の風景を描いた画帖をご紹介します。

作品名：「浪花風景十二月」

作者：二代長谷川貞信

制作年代：昭和 14 年 (1939)



浪花風景十二月 目次

正月 道頓堀初芝居
如月 早春の梅屋敷
雛月 住吉汐干狩
卯花月 野田春日社紫香
皐月 五月雨の茶白山
水無月 名物天神まつり
文月 新清水寺之小瀑
葉月 四ツ橋之夕涼
長月 金城之初秋
小春月 紅葉寺 毘沙門池の楓影
霜月 高津社頭之訪冬
臘月 雪中の松の鼻

(1月) 正月 道頓堀初芝居



芝居小屋が建ち並ぶ道頓堀の浜側を描いた場面です。浜側には「いろは茶屋」と呼ばれる芝居茶屋が建ち並び、芝居前や幕間に食事を提供するほか、切符の手配も行いました。夕暮れ時の茶屋に小舟で客が到着し、二階建ての茶屋障子には飲食を楽しむ客の影が映っています。茶屋の奥は芝居小屋が立ち並ぶメインストリートですが、川からは屋根と官許の印である幕をかけた櫓、左右に立てた梵天がのぞいているのみです。

(2月) 如月 早春の梅屋敷



江戸の亀戸梅屋敷は広重の「江戸名所百景」安政3年（1856年）～5年（1858年）作のうち一景に描かれるほど、全国的に知られる名所でした。文化年間（1804-1817）のころ、大坂でも亀戸の梅屋敷を模して梅林を植え、梅屋敷が開かれました。場所は現在の上本町6丁目～7丁目あたりといわれています。如月の花の盛りの頃は多くの人たちが繰り出し、連歌・俳諧・狂歌、演奏や踊りも楽しんだそうです。秋の菊の頃にも花壇を設けて春秋ともに賑わいました。後年、梅屋敷の北の方に新梅屋敷を設け、こちらは高低差のあるつくりでした。

初代貞信による『浪華百景并都名所』の中に、ほぼ同じ構図の梅屋敷の図が描かれています。初代貞信の梅屋敷は人々が屋敷へ入っていく様子を華やかな色使いで描いているのに対し、息子の2代貞信による本図は月がほのかに照らし、宴のあとに客を見送る場面になっており、まるで初代の絵の続きのように描かれているのが興味深い点です。

(3月) 雛月 住吉汐干狩



船の航行のために建てられた燈台である住吉の高灯籠。この灯籠が目立つ長峡浜は汐干狩の名所でもありました。旧暦3月のひな祭りの頃は汐干狩の季節で、大坂市中や近郊の人々が身分に関わらず浜へ出て、蛤をとって楽しみました。長峡橋の西詰にある茶店では、蛤の吸い物を名物にしており、「蛤茶屋」と呼ばれました。

浜へ訪れるには水路と陸路があり、陸路では紀州街道や高野街道を利用しました。十三間堀川には屋形船が浮かんでいます。奥の浜は汐干狩りの賑わいがシルエットで描かれ、遠方には船の帆がちらほら見えています。

(4月) 卯花月 野田春日社紫香



藤の花は古事記や万葉集にも登場し、日本では古くから広く親しまれている花であることから、新紙幣の5千円札に配置されることでも近年話題になりました。野田春日社の紫藤は、『蘆分船』元禄7年（1694）刊によると吉野の櫻や高尾（京都の高雄）の紅葉と並んで唄われるほど、古来より名所として知られ、林中の藤の花がさざめく様子が波や雲に例えられたといひます。室町幕府の二代将軍足利義詮が住吉詣の途中訪れ、藤を和歌に詠み、豊臣秀吉も藤の花見に訪れ茶会を開いたとも伝えられています。藤の花の盛りには遠近から人々が訪れ、茶店や料理屋もところどころに出店し、賑わうスポットでした。

(5月) 皐月 五月雨の茶臼山



茶臼山は一心寺の南にあり、「荒陵」と呼ばれ、もともと前方後円古墳であったと伝承していますが、古墳だったかどうかには所説あります。大坂冬の陣で家康の本陣となり、夏の陣では真田幸村が布陣しました。

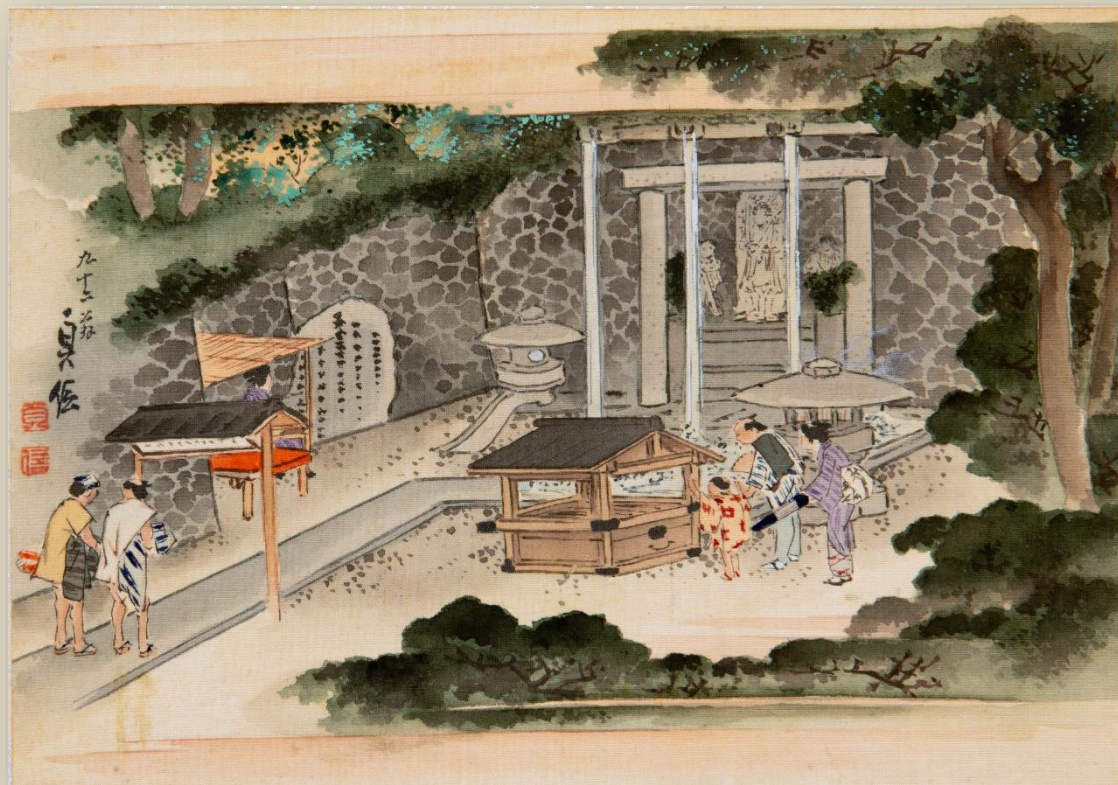
宝暦9年(1759)の一心寺出開帳の折には茶臼山も仮設の茶店で賑わいましたが、神聖な場所のため、その後は立ち入りが禁じられました。「江戸の道灌山・京都の嵐山・大坂の茶臼山」と並び称され、風流な景勝地としても知られていました。

(6月) 水無月 名物天神まつり



天神祭は大阪天満宮の夏祭りです。年に一度、7月25日（旧暦6月25日）に御鳳輦が氏地を巡行するのを祝し、「講」が行列を仕立てて「陸渡御」を行います。のちに御鳳輦を奉安した船を中心に供奉船が伴って、難波橋から戎島の御旅所へと往復する「船渡御」が続きます。御旅所周辺の氏子が仕立て、大きな人形を飾った「御迎船」も加わり、豪華絢爛な賑わいでした。幕末の動乱の時代や戦中には祭りは中止し、その後も地盤沈下による航行ルートの変更などもありましたが、現在も大阪を代表する大祭として続いています。先頭に飾った「御迎え人形」のほとんどは失われてしまいましたが、大阪天満宮に保管されていた16体の人形は大阪府指定有形民俗文化財に指定され、当館に寄託されました。毎年祭りの時期には神社の境内や当館を含む市内の各所に展示され、親しまれています。

(7月) 文月 新清水寺之小瀑



大阪の清水寺は勝鬘院の南にあり、京都の清水寺から聖徳太子作と伝えられる十一面千手観音を移したことから、享保年間（1716～1736）に新清水寺と称するようになりました。清水寺の名のとおり、京都の音羽山清水寺で有名な「舞台」と「滝」を備えています。舞台からかつては南西方向の山海を見通すことができました。滝は「玉手の滝」と呼ばれる清水が3筋あります。

本図は参詣をする子連れの家族や床几に腰をかけて休憩する女性などが描かれ、町人が平素から利用していた寺であったことがうかがえます。着物を脇にかかえた軽装の男性2人連れが滝の方へ向かって歩いています。『浪花百景』の同じく清水寺の図では、滝に打たれる修験者の様子が描かれています。この二人の男性もこれから滝に当たるところでしょうか。

(8月) 葉月 四ツ橋之夕涼



西横堀川と長堀川の交わる位置に「ロ」の字型にかかる橋をまとめて四ツ橋と呼ばれていました。現在も地下鉄の駅名として地名が残っています。俳人の小西来山が「涼しさに四ツ橋を四ツわたりにけり」と詠んだように、風の通る橋上は市民の夕涼みの場ででもありました。手前の下繫橋の橋上には、向かいの橋を眺めている人々の姿があり、奥の上繫橋に目を向けると、布団太鼓の行列が通っています。団扇を手に橋の上で涼みながら祭見物といった様子です。右手奥にビルのように見えるのは積みあげられた材木で、長堀川の両側岸は材木濱と呼ばれました。この周囲には煙管屋も多く、四ツ橋の名物となっていました。

(9月) 長月 金城之初秋



天正 11 年（1583）に豊臣秀吉が築城を開始した大阪城は、難攻不落の巨城に仕立てられていきましたが、大阪冬の陣・夏の陣で廃墟同然となりました。元和 5 年（1619）大坂は幕府直轄領となり、翌年 2 代将軍徳川秀忠により大阪城再築工事が起こされ、3 代将軍家光の時に完成しました。通称「金城（錦城）」と呼ばれ、『撰陽群談』には「金は七宝の初、土中に朽ちず、火も焼くこと能わず。よつてもつて世俗金城と祝し奉る」と記されました。大坂城には 14 代家茂が入城するまで長らく城主が訪れませんでした。幕府から任命された城代をはじめとする大名や旗本たちの武士が城を守っていました。

(10月) 小春月 紅葉寺 毘沙門池の楓影



紅葉寺の愛称で親しまれた「寿法寺」。四天王寺の東北に位置していた広大な池が毘沙門池で、池と四天王寺の間に紅葉寺があります。寺内には糸桜、僧坊の庭前には楓の大樹があり、花の頃、紅葉の時節には人々が集いました。『浪花百景』の中の「寿法寺」（里の家芳瀧画）にも同寺の境内の様子が描かれています。近代に入り、毘沙門池は埋め立てられました。四季折々の植物と風景を楽しむ江戸時代の人々の様子が感じられます。

(11月) 霜月 高津社頭之訪冬



高津宮の絵馬堂の付近は高所で眺めがよく、江戸時代には正面に道頓堀の橋や芝居小屋、手前に南北御堂や今宮戎、そのむこうに安治川、天保山を遠望することができました。本図右側にも赤い遠眼鏡（望遠鏡）で景色を眺める人が描かれています。遠眼鏡を貸し出して、まちなみの説明をする商いが行われていたそうです。左の建物は絵馬堂です。神社の西坂の下にある「黒焼屋」は惚れ薬など不思議な効果のある薬を売るとして有名な店でした。

(12月) 臘月 雪中の松の鼻



木津川と尻無川の間にあった九条寺島。その北端にある、水上に垂れた松の木が見事であることから「松の鼻」「松ヶ鼻」と呼ばれた。松が生えている場所は恵比須祠の側である。樹齢300年におよぶ松を見物するために舟で遊客がよく訪れた。本図では雪の光景だが、夏には水上で酒宴を行い、花火をあげて楽しんだという。寺島には舟大工が多く、造船が盛んであった。右奥には舟が繫留されている小舟、奥には大きな帆柱が描かれている。